

サザン
スクール

高樹のぶ子

SOUTHERN SQUALL

Nobuko Takagi

⑦

日本経済新聞社

サザン
スコール

高樹のぶ子

SOUTHERN SQUALL

Nobuko Takagi

⑦

日本経済新聞社

サザンスコール (下)

一九九一年六月十一日 第一刷

著 者 高樹のぶ子

発行者 樋口 剛

発行所 日本経済新聞社

東京都千代田区大手町一―九―五

郵便番号 一〇〇―六六

電話 〇三(三三七)〇二五一

振替 東京三―五五五

印刷 広研印刷株式会社

製本 大口製本印刷株式会社

本書の無断複写複製(コピー)は特定の場合を除き、
著作者・出版社の権利侵害になります。

© Nobuko Takagi 1991 Printed in Japan
ISBN 4-532-17011-7

サザンスコール（下）

七 章

慌しく秋の気配が訪れた。秋雨前線が日本列島上に寝そべり、それに沿うように二つの台風が通り過ぎた。いずれも関東は大きい被害を受けなかったが、一週間近く雨の日が続いた。そしてそのあとに、冷気が流れこんできた。

隆三はどことなく虚しい、灰色の雨空を、いまの自分にふさわしいと思いながら過した。

仕事は忙しかった。この季節、ポリエステル部門の特許の整理に追われる。各事業所の研究部門や研究所では、所員が年間に三本の特許を申請するのを目標にしている。いまや合繊メーカーは、衣料その他の繊維から大きくはみ出し、軽量で強靱な素材としてスポーツ用品に利用される炭素繊維や、光ファイバー関連製品、食品や薬品にまで手を広げている。そのすべてが、莫大な数の特許によって押さえられていた。申請中の特許の整理は、本社の各部門の、この季節の大きな仕事になる。

そのうえこの秋、産洋レーヨンでは超微細な孔をもつ繊維中空糸を使った超精密ろ過システムを売り出し、好調な伸びを続けている。人工肺にも利用される可能性をもつこの中空糸も、いまでこそこ

うやうやと業界の内外から注目を浴びているが、研究開発は、あの苦しかった第一次石油ショック時代に始められたものだ。光ファイバーや炭素繊維にしても、研究開発の時期に多少のずれはあるものの、会社が立ち直り景気が持ち直したなかで始められたものではない。それ以前の、もっとも苦しかった時期に、研究所の所員によって積み重ねられたものの花が、いま開こうとしているのである。それをするとき、隆三はやはり仲間学のことを考えた。あの当時、自分も彼も、同じような気持でいたのだ。彼は高岡の研究所へ移り、自分はあちこち移動して九州から小田原の研究所へ来た。だから当時の彼の仕事については多くを知らないが、大学の研究室にいた彼の姿から、その真面目な態度は想像がついた。

学から、八重と連絡をとりたい旨の、切迫した電話を貰って以来、彼から電話はない。八重も電話をよこさなかったもので、そのままになっっている。学は妻と連絡がついたのだろうか。あれからかなり日数が経っているのに、八重は沖繩に帰っているだろう。隆三の方から那覇の仲間家に電話をしないのは、隆三に何か、嫌な勘がはたらいたからである。いまの自分が割りこんでも仕方ないような暗い出来事が、止めるすべもなく進行している気がし、隆三は身を退いてしまうのだ。那覇の市外局番を回したあと、隆三は溜息まじりに燿子のアパートの番号を回した。いまの隆三は、燿子と電話で繋がっているときだけが、幸福だった。

隆三が久しぶりに八重の顔を見たのは、青山のファッションショーの会場だった。

一年前から八重が企画し、ようやく実現したショーは、婦人雑誌などの反応もよく、会場を見回し

てみても、かなりの数のメディア関係の人間が来ていた。入口で手渡されたパンフレットには「沖縄の光と風を着る」というタイトルの、八重の挨拶文があった。「沖縄の布は、いのちから生まれます」という文章があとに続き、麻や芭蕉や植物染料が讃美され、最も素朴で原初の布こそ、磨かれた贅沢な女にふさわしいのだと結ばれていた。松越デパートの専務は、「地球を着る女たち」というエッセイで、自社の企画を宣伝している。

モデルたちは背が高く痩せていて、固い小枝を思わせた。いくつもの小枝が、直線裁ちした布の組合せで飾られ、舞台に並べられた印象がある。組合せは意表をつくものもあったが、草木染めのやわらかさを生かした、大人しいものが多かった。外人に近い目鼻立ちのモデルより、濃い眉に黒い瞳を持った沖縄のモデルの方がやはり似合った。

「僕にはよくわからないが、着やすそうなものばかりだね」

隆三は横にいる遠野亜希子に言った。亜希子に会うのも久しぶりだった。

「この素材では、曲線はむつかしいわね。体の線を隠すことは、女にとっては気楽なの。直線の良さを、知的なイメージにまとめるのも、うまくいってるんじゃないかしら。縫製は、大変でしたけど」

「直線なら、そう難しくもないだろう」

「とんでもないわ、薄物が多いし、手織りの布って、均一じゃないから大変なの」
「なるほど」

「あの布、覚えてらっしゃる？」

亜希子に言われるまでもなく、隆三の目は舞台の中央に出てきたモデルに釘付けになっていた。燿子が織った色上布である。海から宮古島を眺めたときに、この縞柄を思いついたという。青は海、生成りは砂浜、緑はモクマオウの林、そして淡々とした赤は浜辺に咲く花だったか。隆三の記憶の中で、宮古の海が揺れた。あの花は多分、野アサガオだろう。燿子がヒルギの林に連れていったとき、車を停めた砂地に、這うように咲いていた。あのとき、突然スコールが来た。スコールの中で隆三は、燿子の唇を奪った。あそこからすべてが始まり、結局この亜希子とは別れたのだ、と彼は、横に座る女を盗み見た。恨みも未練もなく、冴えたまなざしで、彼女は舞台を見つめていた。

亜希子は、燿子が染めて織った布から目を離さずに言った。

「下地燿子さんとは、最近会われたの」

「いや」

「大変ね。大変だけど、愛しがいのある人でしょ」

「逆じゃないかな。空まわりしてるかもしれない」

「八重さんに、どんな女性かって尋ねたら、剥き身の貝みみたいな少女だって……」

「毒もある。それに僕より冷静かもしれない」

「剥き身の貝なんて、ずいぶんセクシーだわ」

隆三も同じことを考えていた。だが、そうだ、とは言わないで黙っていた。体の底に溜まっていた

ものが、不穏な動きを見せた。亜希子の裸身を思い出し、誰にともなくすまない気持になった。気がつくとも燿子の布を着たモデルはひっこみ、三線さんせんのうねるような音楽に乗って、次のモデルが踊り始めていた。隆三は、そろそろ退屈していた。

「……八重さん、辛いわね」

とまた、亜希子が声をかけてきた。舞台の上の三人のモデルは、同じデザインで異った色の組合せを着ていた。長い時間を準備にあてても、勝負は短いな、と思った。八重は、楽屋にいるのか。

「彼女が、どうかしたの」

「離婚なさるみたい。御存知でしょ」

「いや」

「このショーが終ったら、じゃないのかしら」

激しい驚きではあっても、どこかで予感していたことだった。ついに来たのか、と隆三は思った。

「何も聞いてない。そう簡単じゃないよ、離婚というのは。本人から聞いたの？」

「いえ、松越デパートのある人から耳に入ったの」

「ずいぶん前になるが、仲間学から電話があつて、八重さんを探していたことがある」

「京都に行つてらしたときだわ、きつと。私もこのショーのことで彼女に連絡したいことがあつたけど、掴まらなかった。羨しいわ、そんな思い切つた恋が出来るなんて」

恋、という生硬でなまめいた言葉が、亜希子には不似合いだった。隆三は、自分の弱味を指摘され

たように黙った。亜希子はひそめた声ながら、いつになく饒舌だった。隆三はもはや、舞台を見てはいなかった。この年齢になって、自分にも仲間学にも八重にも、思いがけないことが起きるものだな、と呆然としていた。舞台の一部が突然明るくなって、そこに八重が立っていた。拍手が湧いた。隆三も立ち上がって手を叩いた。八重の額と頬は汗で光り、背後からの照明で髪の毛が赤く燃え立って見えた。

ファッションショーの翌日、出社するとすぐ、隆三は八重からの電話を受けた。歯切れのいい、透明な声は、しかしショーの成功の余韻とは遠く、無理に自分を引き立てているように余裕がなかった。「うまくいったみたいで、よかったね」

「遠野さんにはお世話になりました。彼女のおかげです。私と学とのこと、お聞きになられたですよ？」

「小耳に挟んだ、という程度で、僕にはまだ、信じられないのだが……離婚という言葉聞いて驚いている」

「そのうちお目にかかって、お話ししますわ。多分、学もあなたに会いたがるでしょう」

「僕はいま、威張って彼と会うことが出来ない」

「わかってます。耀子ちゃんとあなたのこと、学も知ってます。東京ほど広い場所ではないから、下地耀子が那覇に帰っていることも、風のたよりで学の耳に入ったようです」

「……彼に知られるのは時間の問題だと思っていたよ」

「でも、私と学との間に、もっと大きい問題が持ち上がってしまいました」

「あなたの恋愛でしょう」

八重が電話のむこうで、息をとめている。隆三は、若いころの八重が、そこに顔を赤らめて立っているような気がした。ややあつて、

「……そんなこと、亜希子さん、仰言つたの？」

と、そつけなく突き放すように言つた。

「僕は何となく気がついてた。あなたと学の間は、あぶないな、と思つていた。うまくいつて欲しいとも思つていた。かつて失恋した男の心境は複雑なものだ。しかしいまは、あなたを燃え立たせている男に嫉妬している。僕がかつて出来なかつたことをやっている男に、少々腹を立てている。西合宗馬つて言つたっけね。いつだったか、あなたの口から彼の名前が出たとき、おや、と思つた。あなたの目が夜道の蛇の目みたいに光つたからだ。刃物みたいな男つて、言つたよね」

「……意地悪ね、蛇だなんて」

「否定しないのは、あなたらしいな」

「学との間に大きい問題が持ち上がったつて言つたでしょ。もっと大きい問題なの」

「あなたの恋愛より、もっと大きい？」

「ええ。私の恋愛は時間が限られているんです。学が離婚を言い出したのは、私の留守中にある女性が彼を訪ねたのが引き金になりました。西合染料店の元の事務店員です。いづれゆつくりお話ししま

す。でもまだ、離婚はしてないのよ、それよりあなたに会いたがっている人がいます。西合宗馬。会ってあげて下さいませんか」

西合宗馬から電話がかかってきたのは二日後だった。彼は、夕食をさしあげたいが、平河町の料理屋へ来てくれないだろうか、と言った。隆三は少し考えてから、参ります、と返事をした。

隆三は宗馬についての知識を、可能な限り仕入れていた。総務部に簡単な記録が残っていたが、それは学歴や入社退社の時期に関するものだけだった。彼は、宗馬と同期に入社し、京都支社に長かった男を探し出し、電話をかけた。その男は去年、大阪の系列会社に移っていた。顔は思い出せないが、彼の名前に記憶があった。相手の方は隆三を覚えていた。

彼は西合宗馬について、破格の男だと言った。ひかえめな声の割には強い形容だった。どう破格でした、と尋ねると、彼は困ったように笑い、

「しかし、彼はもう、とつくに会社を辞めてるでしょう」と言った。

「ちょっと個人的に、調べて欲しいと頼まれてね」

隆三は嘘をついた。娘か息子の縁談がらみと思ったのか、電話の相手は少し安心したらしい。

「破格というのは、いろんな意味で情熱的だったということですよ。仕事に関しても女性に関してもね。確か京都の古い染料店の長男か次男でしたよ。金もあったし、なかなかいい男だったなあ。会

社の枠の中に収まりきるタイプじゃなかったから、いずれ辞めるだろうと思ってたし、本人も入社當時から公言してたね。私はその後、全くつきあいが無いが、確か二、三年後輩の仲間という男なら、私より詳しく知っているんじゃないかな。気が合つてよく一緒にいたような気がするけれど」

平河町の指定された料理屋へ出向く車の中で、隆三はいつになく緊張している自分を感じた。仕事上で会うどんな立場の人間とも違っていた。八重から、病人だと聞かされていた。病人ですけど、そんなふうには思わない方がいいわ、と八重はつけ加えた。八重は宗馬との関係を、隆三に隠さなかったが、その恬淡とした態度が宗馬の影響なら、恐ろしい男だと思った。なぜ自分に会いに来るのかも、八重は言わなかった。ただ、会いたがつている、と言った。宗馬と会う前に、やはり八重に会つておいた方がよかつたかもしれないと、皇居の濠の深い緑色に目を預けながら思った。

燿子をめぐる話になるのは間違いない。隆三は自分の立場を考え、負い目を感じた。だが相手だつて、隆三から見れば友人の妻を寝取つた男なのだ。彼は腕を組み目を閉じた。破格と言うなら自分も破格だ。それはあまり利口ではないという意味かもしれない。彼は目を閉じたまま低く笑つた。

料理屋の入口で名前を言うと、奥の小部屋へ通された。茶室のような天井の低い部屋は、簡素な華やぎに満たされていた。低い屏風の手前の、備前焼に投げこまれた桔梗が、まず隆三の目にとびこみ、次にその傍らに座つた男が見えた。桔梗と男は、同じように細く、気高く、鮮明な輪郭をもつていた。男が立ち上がり、

「どうぞこちらへ。よく来て下さいました」

と言った。

「こういうものを出すべきかどうかわかりませんが、長いあいだの習慣ですから」

男は和やかな目で、名刺を取り出した。隆三もそうした。二人はまた座り、女が運んできたおしほりをつかった。

「私が会社にしたあいだ、どこかでお会いしていたかもしれない。研究所は九州と小田原だったそうですね。昔の部下に、尋ねましたよ」

「私も同じようなことをしました」

「私を覚えている者がいましたか」

「いました。破格の人だ、というようなことを言っていました。どう破格なんだ、と聞いたが、うまく応えてもらえなかった」

「適当に逃げられたんじゃないやありませんか」

「そうかもしれない。沖間八重さんから、御病氣だと聞きましたが、そうは見えませんか」

「まだ大丈夫ですよ。酒が飲めますから。医者に言わすと、酒が飲めるあいだは心配ないんだそうだ。何年か前は酒をひかえろと言った医者が、最近は、酒も栄養だから飲めと言ってる」

破顔した目が、灯りのせいか黄色かった。目は笑っていても、口元や顎には意志の強さが張りついている。そのアンバランスが、男を魅力的に見せた。隆三は、この男が八重を抱いたのだ、と思った。そのときの八重の姿を想像した。一瞬、八重の愉悦の表情が見えた。嫉妬ではないが、不思議な心地

がした。こういう想像は、男の習性だろう。宗馬を見る目がわずかに翳り、同時に奇妙な同胞意識が生れた。女が酒と料理を運んできて、隆三と宗馬に日本酒を注ぐと、あとはよろしくお願いします、と言って出ていった。隆三と宗馬は、斜めに向かい合い、宗馬の影は、隆三の胸元に落ちていた。

「お呼びたてしていながらこんなことを言つては申し訳ないんだが、あらたまつて用事があるようなないような……ともかく、お会いしたかつたんです」

「私も実はそうです。西合宗馬という人に大変関心がありまして、どうしてもお会いしておきたかつた」

「八重さんから、いろいろお聞きでしような」

「おふたりのことは、まあ、聞いても仕方ないですよ。どうも、羨しいようなしやくなような気持はありますが。先日の電話では、沖間学と離婚することになりそうだと言つてました。これは少し、気にかかっています。大学時代の親友ですから。そのうち学から連絡が入るでしょう。しかし、思いがけないことではあります」

隆三は、自分と耀子のことをおくびにも出さない相手に、強く出ることが出来なかつた。八重が話してはいないはずがない。

「いや、本当に考えてもいなかった方向に行つてしまつた。無責任な言い方だが、私のいのちは限られてゐる。沖間夫婦の離婚までは思わなかつた。八重さんがつつ走つてしまつたわけではない。うちにいた事務員が、八重さんの留守に沖間学に会いに行き、いろいろ喋つてしまつた」

「そうらしいですね、そんなことを八重さんが言っていました」

「私とのこともまあ、知られてしまったわけだが、八重さんが亭主を疑って過去のことを調べていることがバレてしまった。夫婦のお互いの裏切りがわかってしまったわけで、どうも具合の悪い方向に行ってしまった。それについては、杉野さんにも、多少責任があたりだ」

「大いに責任がありますよ。下地耀子が発端なんですから」

隆三は、宗馬の目を見て言った。ようやくその話になったか、とむしろほっと楽な心地になった。

隆三は、耀子にせがまれて保谷市の一角を訪ねた日のことを思い出していた。午後の白い陽に包まれた旧い通りや、耀子を待っていた喫茶店、それから、耀子を見失ったあと駆けずりまわった汗まみれの自分を思い出し、いま、西合宗馬と対面しているのを不思議に思った。耀子が解こうとした謎は、娘が母親について識りたいという、単純で直截ちよくせつなものだった。その謎が半ば解けかけている。さらにその謎は、沖間夫婦を道連れに、溶解を始めてしまった。あるとき耀子の欲求をしりぞけ、母親の足跡を訪ねることの無意味を彼女に納得させることが出来たなら、耀子は東京へ出てくることも京都へ行くこともなかっただろう。耀子は宮古で上布を織り続けていただろうし、宗馬と八重が会うこともなかったのだ。

あのとときなぜ、耀子のためにひと肌脱ぎたくなつたのか。

耀子に惚れたからだ。スコールに打たれて若い体を抱きしめたとき、さらに深く彼女を所有したいと思ったからだ。その情動が自分に起きなければ、沖間夫婦に離婚騒動は起きなかったことになる。